

東京五輪決定に沸く9月。再びやってくるスポーツの祭典は何をもたらすだろう。オリンピックに向かうこの8年以上に、その後が案ぜられる。

今、「里山資本主義」なる構想が静かなブームになっている。NHK広島が手掛けた同名の番組シリーズをもとにした新書も、1ヵ月で10万部を突破している。この本で紹介されている中四国地方の実践は、震災後に打ち出した「FEC自給コミュニティ」の実現可能性を示す希望である。特にエネルギーの自給・循環は、なかなか現実化が難しいと思っていた憂いを払しょくしてくれる。さっそく岡山県真庭市を訪ね、木質バイオマスの発電や発熱のシステムを視察させて頂いた。訪れたのは銘建工業という製材メーカーと真庭市役所。銘建工業は、集成材生産と木質バイオマスのパイオニアである。木質バイオマスの自家発電システムを地域に広げ、クロス・ラミネイティッド・ティンバー (CLT) と呼ばれる集成材によって、地域で賄い循環する経済の魁を切り拓く。真庭市役所も、新庁舎の横に木質ボイラー施設を設け、現在市内全世帯の電力を賄えるバイオマス発電所建設計画が進められている。この視察を通じて、日本社会の豊かさの基準がお金と経済成長に隔たる中で、自分たち(の地域)で、暮らしの基盤となる産業を循環型にし、地域の資源に目を向けることで、新しい豊かさを考える息吹が湧き上がる様を目の当たりに

した。それは、市民自身が自分たちの地域の在り様を自分たちで定め創っていく、市民自治の実験でもある。経済成長に価値を置く産業から、コミュニティの持続に価値を置くコミュニティ産業の胎動を感じる。

我々の実践も、BDF3拠点の本格化や、豊岡で始まった森林・里山整備の事業化の先にある、地域づくりの可能性に大きな光がさした思いである。そして、「里山資本主義」という、自分たちの足元や自然と共生する地域づくりを通じて、お金や経済成長には換算できない産業の創出の可能性は、震災を教訓とする日本社会のビジョンとすべき構想である。そんな思いを強くしながら、全てのワーカーズコープの拠点が「総合福祉拠点」を目指そう、と力強く実践を起こしている。全国10地域をモデルに定めたこの取組みは、部分的な協同労働運動を、地域丸ごと・市民みんなの運動に発展にしていく試金石である。どんな拠点が登場するか。その物語が紡がれ、今後発信されていくことに期待したい。

いよいよ各分野の全国集会が始まる。皮切りは「自立・就労支援 社会化推進フォーラム」。生活困窮者をはじめとする困難を抱え孤立する人々が、居場所と役割を得て、社会の中で存在感を培いながら取り込まれる「地域づくり・仕事おこし」の物語。制度化に向けた課題とともに、社会のあり方に一石を投じる機会としたい。